

# VIRIDITAS

ヴァイリディタス



Keiji Taha

## 平 圭司さん

私が作るのは、世界に一つだけのペンです。  
温もりや柔らかさを感じられる木のペンは、  
使っていくうちに色に深みが増し、味わいが出てきます。  
美しい木目は、  
まるで風景のようにも感じられます。



## 海

沿いにある工房を訪ねると、出迎えてくれたのは可愛いヤギと、五十羽を超える鶏たち。その光景に平圭司さんの暮らしと人柄が見えたような気がした。

東京生まれの平さんが妻・飛鳥さんの生まれ故郷である長崎に移住し、この地で活動を始めたのは、二〇一八年のこと。以来、外海産をはじめ長崎県産の木材や、日本各地の銘木、世界中から収集した希少木やカラフルなアクリル樹脂を原料に、万年筆やボールペンなどを制作している。

「これらが長崎県産の木で作ったものです」。平さんの手の先には、十五種類



長崎県産の木で作られたボールペン。  
木の種類によって表情が異なるのが魅力。

もののペンが並んでいる。中にはモチノキやハマビワなど聞き慣れない木の名前も見られる。しかし共通しているのは、息を呑むほどの美しさ。「書きやすさやデザインはもちろんですが、仕上げにもこだわっています」との言葉通り、どれもが美術品を思わせる気品がある。

工房が位置するのは、世界文化遺産「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産となっている集落がある外海地域。平さんは、かつて潜伏キリシタンが外海から五島へと渡った海や、教会のステンドグラスに着想を得たペンも制作している。色とりどりのペンを手に取ると、物語が見えるようだ。

一本のペンが生まれるまでには、長い年月がかかる。冬、山に入って切った木は四、五年かけて乾かし、さらに製材後も半年ほど乾燥させるといふ。そして素材の一つ一つを丁寧に加工していく。「木には削らないと見えないもの、削ると見えなくなるものがあります」。平さんから発せられる言葉は、人生の格言のようだ。

「良い木に出会うと、創作意欲が湧きます。また『この材料で作ってみたらどうなるだろう』と考えると、ワクワクするんです」と笑う平さん。工房には、ペンになる日を待ちわびるかのよう、たくさんの木材が積み重ねられていた。

ペンの材料となる、アクリルと木々を組み合わせた角材も一から手作り。  
素材から手作りするペン作家は珍しいという。どれも世界に一点だけのオリジナルだ。



世界に一つだけのペンは  
きこごと  
一生もののペンになる。